

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Diachronic Changes in First-Person Pronouns in Literary Style Text during the Meiji and Taisho Periods: Analysis of the “Corpus of Historical Japanese, Meiji Era / Taishō Era Series I: Magazines” and the “Toyo Gakugei Zasshi”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明日子, KONDO, Asuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001413">https://doi.org/10.15084/00001413</a>

## 明治・大正期の文語文における一人称代名詞の通時的変化

——『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』と『東洋学芸雑誌』を用いた分析——

近藤明日子

国立国語研究所 コーパス開発センター 非常勤研究員

### 要旨

明治・大正期の非文芸ジャンルの文語文における一人称代名詞の量的・質的な通時的変化の実態について明らかにすることを目的として、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』と『東洋学芸雑誌』1～15号を資料として調査・分析を行った。その結果、(i)単数用法における「ごじん(吾人)」の増加・進展と、それに伴う「よ(余)」の減少、(ii)複数用法における「われら(我等)」の増加・進展と、それに伴う「ごじん」「われ(我)」との拮抗、(iii)「ごじん」の単数用法の進展に伴う、単数・複数の用法間における語形の使い分けの消失、等が見られた\*。

キーワード：近代語、文語文、一人称代名詞、単数・複数用法、『日本語歴史コーパス』

### 1. 研究の背景と目的

明治・大正期の日本語の一人称代名詞には種々の語形があり、それぞれの語形の消長過程や語形間の用法差等についてこれまでに研究が蓄積されてきた。その研究の多くは、小説・戯曲の会話部分、落語速記、口語文典などの話し言葉の性質の強い口語文から用例を抽出し、当時の話し言葉での一人称代名詞の使用実態を明らかにしようとするものである<sup>1</sup>。一方で、当時の書き言葉の性質の強い文章にも一人称代名詞は無視できない数が出現し、話し言葉とは別の実態がある。本稿筆者は近代の書き言葉における一人称代名詞について、国立国語研究所(編)(2005)『太陽コーパス』、国立国語研究所(2006)『近代女性雑誌コーパス』、国立国語研究所(2012–2013)『明六雑誌コーパス』、国立国語研究所(2014)『国民之友コーパス』の4種の近代雑誌のコーパスを利用して、各コーパスにおける実態の一端を明らかにしてきた(近藤 2013a, 2013b, 2016a, 2016b)。近代雑誌コーパスには多数の著者による論説文・評論文・報道文といった文芸ジャンル以外の多様な書き言葉の性質の強い文章が大量に収録されており、当時の書き言葉を一望するのに好適な資料である。

そこで、本稿では、各コーパス内での考察にとどまっていたものを各コーパスの収録雑誌の刊行年の時系列順に分析結果を比較し、明治・大正期の非文芸ジャンルの文語文における一人称代

\* 本稿の内容は、第161回 NINJAL サロン(平成29年6月20日開催)での発表をもととしている。また、本稿の一部は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」(プロジェクトリーダー：小木曾智信)およびJSPS 科研費・基盤研究(A)「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」(JP15H01883, 研究代表者：小木曾智信)の研究成果である。

<sup>1</sup> 例えば、比較的長い年代にわたる複数の資料を対象に幅広い一人称代名詞の語形を抽出して研究するものとして岡田(1998)・房(2004)・祁(2006a・2006b)などがあげられる。

名詞の通時的変化の実態を明らかにすることを試みる。通時的変化のより詳細な分析・考察を実現するため、上記の4種の近代雑誌コーパスを統合・増補して構築された国立国語研究所(2017)『日本語歴史コーパス 明治・大正編I雑誌』(以下、『CHJ 明治・大正編I雑誌』と呼ぶ)と、その年代的な欠落を補完する資料として『東洋学芸雑誌』1～15号を使用する。

## 2. 調査対象資料の選定と一人称代名詞の抽出・分類の方法

### 2.1 調査対象資料の選定

本節では、調査対象資料の選定方法とそこから一人称代名詞を抽出し分類する方法について説明する。

まず、調査対象資料について説明する。本稿で調査対象とする第一の資料は『CHJ 明治・大正編I雑誌』である<sup>2</sup>。『CHJ 明治・大正編I雑誌』は『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』の4種の近代雑誌コーパスを統合して構築された。特に、『太陽』と女性雑誌3誌のデータにおいて前身の『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』にはなかった形態論情報が新たに付与され、さらに著作権の関係上収録されていなかった記事もすべて収録されるという大幅な増補が行われており、より精緻な調査・分析が可能であると考え、調査対象資料とした。

そして、研究目的にそった用例抽出を行うため、以下の①～⑤の条件を満たすサンプル<sup>3</sup>を対象に調査を行うこととした。

#### ① 出典雑誌が『明六雑誌』『国民之友』『太陽』

『CHJ 明治・大正編I雑誌』にはこの3誌のほかに『女学雑誌』『女学世界』『婦人倶楽部』の女性雑誌3誌を出典とするサンプルが収録されている。女性雑誌3誌のテキストの性質やそこで用いられる一人称代名詞の実態は、主に男性を読者層とする他の3誌とは異なっているという指摘がある(近藤 2013b, 2017)。また、女性雑誌3誌の収録刊行年は1894-1895年・1901年・1925年の3期のみで各期のデータ量も多くなく、明治・大正期を通しての通時的変化を考察するには十分ではない。本稿では性質の均質化された資料を用い、そこでの明治・大正期の通時的変化を考察するために、女性雑誌3誌は除き『明六雑誌』『国民之友』『太陽』が出典のサンプルを対象とすることとした。コーパスの作品名情報が「明六雑誌」「国民之友」「太陽」のいずれかであるサンプルを抽出した。

#### ② ジャンルが非文芸

本稿は非文芸ジャンルの文章での一人称代名詞の実態を明らかにすることを目的とするた

<sup>2</sup> 本稿で使用する『CHJ 明治・大正編I雑誌』のデータは、一般公開されている「短単位バージョン1.1」(本稿執筆時点の最新バージョン)そのものではなく、その元データである、国立国語研究所のデータベースに格納されているデータに対し、2.2節に述べるように本稿調査のために形態論情報の修正を独自に行ったものである。

<sup>3</sup> サンプルとはコーパス収録対象として選定されたひとまとまりのテキストの範囲を指す。『CHJ 明治・大正編I雑誌』では、雑誌に掲載された各記事を単位としてサンプルが定められている。

め、本条件を設けた。コーパスのジャンル情報が「非文芸」となっているサンプルを抽出した。

③ 地の文の過半が文語で書かれている

サンプルの著者の言語のありようを直接的に表すのは、サンプル中、他文献からの引用部分や登場人物の会話部分を除いた、地の文の部分である。地の文の文体は文語・口語、またはその混用とサンプルによって異なる。本稿は文語文での一人称代名詞の実態を明らかにすることを目的とするため、本条件を設けた。コーパスの本文種別情報が空欄（地の文であることを示す）の語数を文体情報別に集計し、文体が「文語」の短単位数が「口語」の短単位数より多いサンプルを抽出した。

④ 翻訳ではない

翻訳文では原語の影響を受けた語形選択がされる可能性があるため、調査対象から除くこととした。コーパスの著者情報に「(訳)」の付いている著者名のあるサンプルが翻訳であることから、それ以外のサンプルを抽出した。

⑤ 著者が特定の1名

本稿では著者単位で分析を行う方針から、著者が特定の1名であることがわかるサンプルを調査対象とすることとした。コーパスの著者情報に「(作)」の付いている著者名が1つのみあがっており、それが著者不明を意味する「\*」でないサンプルを抽出した。

本稿で第二に使用する資料は『東洋学芸雑誌』1～15号（初版）である<sup>4</sup>。『CHJ 明治・大正編 I 雑誌』は収録する雑誌の刊行年を6～8年間隔とすることで通時的研究の可能な設計を目指している。ただし、『明六雑誌』（1874・1875年刊）と『国民之友』（1887・1888年刊）とのデータ間のみ13年間隔となっており、その間をつなぐ資料を補うほうが通時の変化をより精緻に捉えることが可能と考えた。そこで、当時刊行されていた多様な著者による多様なジャンルの記事を収録した代表的な雑誌として『東洋学芸雑誌』を選定し<sup>5</sup>、1881・1882年刊分の1～15号を使用することとした（図1）。

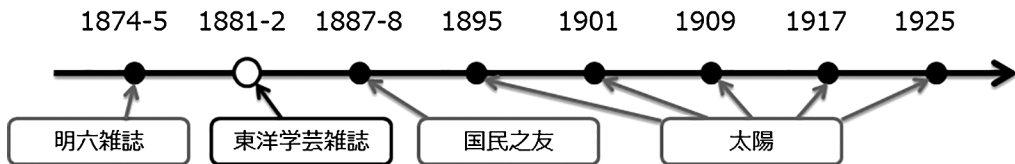


図1 『CHJ 明治・大正編 I 雑誌』収録3誌と『東洋学芸雑誌』1～15号の刊行年の関係

<sup>4</sup> 1～10号は東京大学総合図書館蔵本（請求記号 ZA:148）を、11～15号は学習院大学図書館蔵本（請求記号 405/1/P）を参照した。

<sup>5</sup> 『CHJ 明治・大正編 I 雑誌』の補完のためには、1881年前後に刊行された、多様な著者による多ジャンルの啓蒙的内容の文章を収録した当時を代表する雑誌であることが必要と考えた。そこで、国立国語研究所国語辞典編集準備室（1983）に示された刊行年・分野・一致度を参照し、『東洋学芸雑誌』の選定に至った。

『CHJ 明治・大正編 I 雑誌』の構築方法に倣い、『東洋学芸雑誌』でも本文テキストの校正、サンプル単位の認定、著者・ジャンル・地の文部分・文体等の付加情報の認定を行い、上記の①～⑤の条件を満たすサンプルを調査対象とした。

以上により選定した調査対象資料の言語量を雑誌種類ごとに示したものが表 1 である。雑誌種類とは雑誌名と刊行年による分類で、『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』『国民之友』は各雑誌名と対応し、『太陽』はコーパスに収録された 5 カ年の刊行年に対応する。『東洋学芸雑誌』は形態素解析を行っておらず文語地の文の延べ短単位数は不明のため、表中「—」で示した。

表 1 調査対象資料の言語量

雑誌種類	雑誌名	刊行年	著者数	サンプル数	文語地の文 延べ短単位数
明六	明六雑誌	1874・1875	14	133	144,667
東洋	東洋学芸雑誌	1881・1882	41	87	—
国民	国民之友	1887・1888	73	281	351,203
太陽 I	太陽	1895	203	390	972,342
太陽 II	太陽	1901	116	302	967,267
太陽 III	太陽	1909	69	148	501,050
太陽 IV	太陽	1917	24	35	144,454
太陽 V	太陽	1925	2	14	4,595

## 2.2 一人称代名詞の抽出

次に、2.1 節で選定した調査対象資料から分析に使用する一人称代名詞の用例を抽出する方法について説明する。『CHJ 明治・大正編 I 雑誌』サンプルからの抽出は以下の①～⑤の手順によった。

- ① 調査対象資料から品詞が「代名詞」の短単位を抽出
- ② ①から主に一人称代名詞として使用される語形を選定
- ③ ②で選定した語形の表記やルビ等を手掛かりに、コーパスの形態論情報を独自に修正
- ④ 修正したコーパスで改めて①②を行い、その語形を一人称代名詞の候補として抽出（複数を表す接尾辞「ら（等）」「ども（共）」「はい（輩）」が後接する語形は接尾辞と合わせて 1 語形として抽出）
- ⑤ ④の候補のうち、文脈内で実際に一人称代名詞として用いられていると判断した用例を抽出

手順⑤において、文脈上、著者個人あるいは著者を含む複数人を指している用例を一人称代名詞として抽出した。逆に、そうではないと判断される用例は一人称代名詞とはしなかった。一人称代名詞としなかった用例は以下の A) ～ C) のようなものである。

### A) 反照代名詞として用いられる用例

- (1) 貧書生に花見行を誘はるるも、若し會計の負擔にして、盡とく我れに歸するの恐れあらば、

- 誰れか之に應ずるものあらん、(60M 太陽 1895\_06042 「某大佐の兵事談」陸軍大佐某) 6
- (2) 策畧家にも、色々あり、我を褒めてくれたるお禮として他を褒むるものあり、これ人情の弱點也。  
(60M 太陽 1901\_01009 「藤原時平」大町桂月)

B) 引用に準ずる部分(用例中        部分) で用いられる用例

- (3) 大きな立派なる男と爲りて後までも親の膺をかぶり、親の厄介と爲つて居ることを耻と爲さず、以爲らく我家豊裕なり、吾れ我が親の爲めに養はるとして何の妨ぐることあらんと、敢て自から一個の生業を營むことをも爲さず、遊居し、坐食し、喰潰しと爲りて了らんとす、  
(60M 国民 1888\_32004 「子婦は舅姑と別居す可し (一)」植木枝盛)
- (4) 人々箇々獨立、各自の家庭に、何の連鎖もなく、お前は、お前、わたしは、わたし、と浮世の風波に漂ふ様なるぞ、なんぼう心細く歎かはしき次第ならずや。  
(60M 太陽 1895\_12030 「歳暮」HM 生)

C) 慣用的表現(用例中        部分) に用いられ代名詞としての意味が希薄になっている用例

- (5) されど斯く手前味噌をば披露致し、(60M 国民 1888\_25011 「民友記者に寄す」野口寧斎)
- (6) 梅は大木ならねど紅白數株ありて我は顔に色香を戦はすも亦よそにすべからざる名所の一つといふべし。  
(60M 太陽 1895\_02016 「東京花暦 (其一)」胡蝶)
- (7) 現に墓前に居りながら、なほ人に問ひたるが、我れながら間の抜けたるに、可笑しくなりぬ。  
(60M 太陽 1909\_06030 「京の東山」大町桂月)

この他、サンプル 60M 太陽 1901\_13008 の後半部分が口語文となっており、そこに出現する一人称代名詞も分析対象外とした。

『東洋学芸雑誌』では原本の目視と電子化した本文テキストの文字列検索を組み合わせ用例を抽出した。

### 2.3 一人称代名詞の分類

次に、2.2 節で抽出した一人称代名詞の分類方法について説明する。抽出した一人称代名詞は、著者個人を指す用法(以下、「単数用法」と呼ぶ)と著者を含む複数人・集団を指す用法(以下、「複数用法」と呼ぶ)の2種類の用法を持つ。文脈からは単数・複数どちらの用法とも解釈可能で分類が困難な用例も多いが、およそ以下のA)・B)のような文脈で用いられるものを複数用法として分類した。

A) 共起する語句(用例中        部分) から複数人・集団を指すことが明らかである場合

- (8) 余輩 全國民は豈に之を陸海軍人のみに一任して傍觀するを得んや、  
(60M 太陽 1895\_03051 「園田孝吉君の經濟時事談」園田孝吉)

<sup>6</sup> テキストの引用に際し、末尾の( )内にテキストの所在として、サンプルID(『東洋学芸雑誌』の場合は号数)・サンプルタイトル・サンプル著者名を示す。



- (9) 起てよ我が四千萬の同胞、吾人が起つべき時は始めて來れり。  
(60M 太陽 1895\_01012 「日本帝國の任務」中西牛郎)
- (10) その後、先生が病の床に臥し玉ひ、病勢ますます進みしかば、同窓諸氏は憂慮に堪えずして、白石正邦君と余とをして、先生を慰問せしめぬ。先生は専ら余等を平生の書齋たる病室に呼び入れ玉ひ、起き直りて床上に端坐し、  
(60M 太陽 1901\_08024 「藤田東湖の半面」横山健堂)

B) 著者個人だけでなく著者を含む集団に普遍的な事象について述べていると判断される場合

- (11) 則ち時下宗教上の信向著書、會談等は、就中著明の原力にして、吾人の腦中に、冥々の感勢を有し、吾人の感觸を攪發し、吾人の常習を陶冶するものなり、  
(『東洋学芸雑誌』7号「形質遺傳と教育の關係を論ず」西村貞)
- (12) 今余は左に速かに脱却せざる可らざる東洋流の氣風通弊二三を述べ大方君子の注意を仰がんと欲するなり第一、吾人が速かに脱せずんばある可らざるは東洋の英雄風なり  
(60M 国民 1887\_05022 「東洋流の氣風を脱せざる可らず」小崎弘道)
- (13) 我主力艦（ド級艦）の七隻なるに對し、英は四十一、獨は約二十、米は十四を數ふ。尚ほ之を將來の計畫に徴するも英、米、獨の諸國共に我に數倍す、  
(60M 太陽 1917\_03018 「日支軍備の關係を論ず」葛生東介)

上記以外で、単数用法とすることに難のない用例は極力単数用法に分類した。以下の(14)～(17)のようなサンプルの主題に関する意見・主張を述べる文脈に使用される一人称代名詞は、著者を含む集団を指すことで世上一般的な意見として述べている可能性もあるが、著者個人の意見として述べているものとして単数用法の用例として分類した。

- (14) 故に力を盡して人民自由自主の説を主張して喩へ政府の命と雖無理なる<sup>レ</sup>は之を拒む權ある<sup>レ</sup>を知らしめ自主自由の氣象を我人民に陶鑄するは我輩の大に望む所なり  
(60M 明六 1874\_03002 「出板自由ならんことを望む論」津田真道)
- (15) 是等の道理に照し合せて現今我社會の情勢を回顧すれば余輩聊か遺憾に堪えざる者あるなり  
(『東洋学芸雑誌』5号「日本製造論一斑」川田徳二郎)
- (16) 今藪鶯を通觀するときは孰れを主人公となすや予は實に其判斷に苦しむなり否な予は一讀主人公なしと判定せり  
(60M 国民 1888\_25043 「藪鶯の細評」石橋忍月)
- (17) 吾人は平生我が銀行家間に、徳義を輕視して、當然負ふべき責任を免かれんと欲し、因て其の信用を破り、延て金融機關の作用を鈍らすこと多きを歎ずるものなり。  
(60M 太陽 1901\_12010 「〔經濟時評〕」坪谷水哉)

その他、以下の(18)～(20)のように、著者の体験を語る文脈において指し示す人が複数人であることが明示されていない場合も、単数用法として分類した。

- (18) 余十年前和蘭に遊びし時和蘭にて其頃有名の哲家たるは阿伯曾米爾氏なり  
(60M 明六 1875\_38001 「人世三寶説 (一)」西周)

- (19) 去乍ら彼地の婦人などが種々歌樂を弄そぶ折柄余輩への愛想にピアノ等にあはせ「宮さん  
宮さん」を挿みうたふことあるときは余輩は之を聞てタダ何となく其乏ほしく淋しきを覺  
ゆるの念のみ先きだち (60M 国民 1888\_30004「和歌を論ず (一)」森田思軒)
- (20) 歓迎會に迎へられ、送別會に送られ、心ある人々に燈籠まで送られて、われは、終に雪の  
草津を出でぬ。 (60M 太陽 1909\_01031「冬の旅」大町桂月)

### 3. 一人称代名詞の語形と使用量の概要

2節で抽出・分類した一人称代名詞について、その語形ごとに、粗頻度・使用サンプル数・使用著者数を用法別に示したものが表2である（語形の五十音順に掲出、表3・表4も同様）。語形はひらがな表記に続けて（ ）内に代表的な漢字表記を参考に示した。「我濟」「私」「妾」はルビのない漢字表記で、かつ語形を一つに確定することが困難だったため語形不明とした用例であり、本文テキストでの漢字表記のまま示した。使用サンプル数・使用著者数は1サンプル・1著者が複数の語形を使用する場合、それぞれの語形でカウントした。また、表中の空欄は数値0を示す（以下の表でも同様）。

表2 一人称代名詞の粗頻度・使用サンプル数・使用著者数

一人称代名詞語形	粗頻度			使用サンプル数			使用著者数		
	単数	複数	全体	単数	複数	全体	単数	複数	全体
ぐしょう (愚妾)	1		1	1		1	1		1
ごじん (吾人)	1368	666	2034	243	146	335	131	102	179
ごじんら (吾人等)		1	1		1	1		1	1
ごせい (吾儕)	11	1	12	9	1	9	5	1	5
ごそう (吾曹)	1		1	1		1	1		1
しょうし (小子)	29		29	8		8	1		1
しょうしはい (小子輩)	1		1	1		1	1		1
しょうせい (小生)	106		106	18		18	18		18
せっしゃ (拙者)	2		2	1		1	1		1
それがし (某)	3		3	2		2	1		1
ぼく (僕)	54		54	5		5	5		5
ぼくはい (僕輩)	1		1	1		1	1		1
よ (余)	2929		2929	584		584	280		280
よせい (余儕)	3		3	2		2	2		2
よはい (余輩)	582	23	605	182	10	185	86	9	86
よはいら (余輩等)	3	1	4	2	1	3	2	1	2
よら (余等)	24	52	76	17	18	33	17	15	28
わがはい (我が輩)	337	39	376	86	21	101	42	19	51
わがはいら (我が輩等)		1	1		1	1		1	1
われ (我)	343	629	972	103	177	274	49	100	131
われら (我等)	257	105	362	38	46	79	18	36	49
われわれ (我々)		69	69		28	28		25	25
我儕	3		3	2		2	2		2
私	1		1	1		1	1		1
妾	1		1	1		1	1		1



これによれば一人称代名詞の語形の種類数は22である（「我儕」「私」「妾」は除く）。これらの語形の使用の多寡を測る指標として、表2にあげたように、粗頻度・使用サンプル数・使用著者数の3種が考えられるが、以下本稿では使用著者数を用いることとする。粗頻度を用いない理由は、一人称代名詞は特定の少数のサンプルに高頻度に使用される傾向があり、粗頻度はその特定の少数のサンプルの言語のありように影響を受けた値であると考えられるためである。使用サンプル数を用いない理由は、特定の少数の著者のサンプルが多数コーパス中に収録されている場合があり、出現サンプル数はその特定の少数の著者の言語のありように影響を受けた値であると考えられるためである。これに対し、使用著者数は指標として用いるのに相対的に問題が少ないと考えるものである。

#### 4. 一人称代名詞の使用著者数の通時的変化

##### 4.1 単数用法の一人称代名詞

ここから、表2の使用著者数を雑誌種類別に分けて示し、通時的変化を見ていく。

最初に、単数用法の通時的変化を見ていく。単数用法の一人称代名詞の使用著者数を雑誌種類別に示したものが表3である。

表3 単数用法の一人称代名詞の雑誌種類別使用著者数

一人称代名詞語形	明六	東洋	国民	太陽 I	太陽 II	太陽 III	太陽 IV	太陽 V
ぐしょう			1					
ごじん	3	4	19	50	34	21	11	
ごせい	3			1	1			
ごそう						1		
しょうし	1							
しょうしはい	1							
しょうせい			8	1	3	5	1	
せっしゃ			1					
それがし	1							
ぼく	2		3					
ぼくはい	1							
よ	13	30	40	115	65	37	9	1
よせい	1			1				
よはい	4	6	17	32	19	8	3	
よはいら				1	1			
よら	1		1	8	3	3	1	
わがはい	6	8	11	6	9	3	1	
われ	6	2	12	15	5	4	1	
われら	1		3	3	5	4	2	
我儕			2					
私				1				
妾			1					
一人称代名詞 使用著者数	14	34	63	161	96	56	22	1

表3によれば、単数用法の語形の種類数は19である（「我済」「私」「妾」は除く）。このうち、複数の雑誌種類にわたって使用著者数が上位に位置する「ごじん」「よ」「よはい」「わがはい」「われ」を主要語形と見なし、その使用著者率の通時的変化を示したものが図2である。使用著者率とは、一人称代名詞を使用する全著者数（表3の最終行の値）に占める各語形の使用著者数の割合（単位％）のことである。言語量の異なる雑誌種類間の値の多寡を比較するために、使用著者数の実数ではなく使用著者率を使用するものである。なお、雑誌種類「太陽V」は語形数・使用著者数ともに1と用例がごく少ないため、図示せず分析の対象から外す（以下同様）。

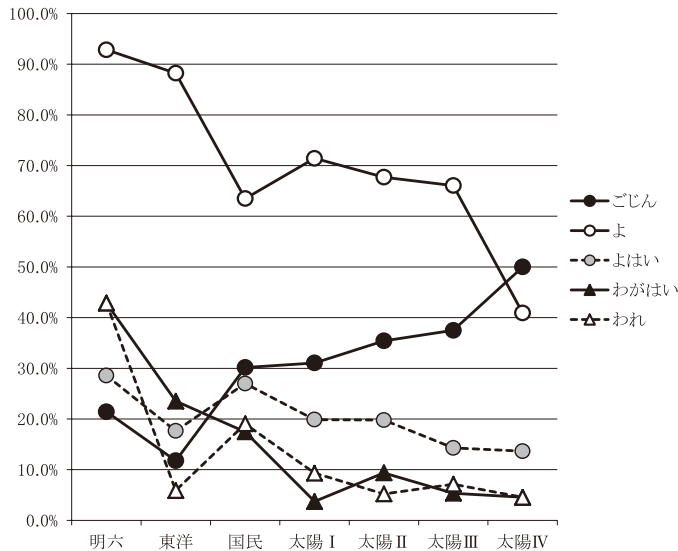


図2 単数用法の主要一人称代名詞の使用著者率の通時的変化

図2から見出せる変化としてまず「ごじん」の増加があげられる。明六・東洋では21%・12%に過ぎないものが国民以降増加し太陽IVでは50%となり、それまで使用著者率第1位であった「よ」を超えて最も多く使用される語形となる。

その「ごじん」に対して大きく減少する変化を見せるのが「よ」である。「よ」は明六・東洋では使用著者率93%・88%であったものが、国民以降減少して太陽IVでは41%にまで至り、使用著者率第1位の位置を「ごじん」に譲る。

他に指摘できる変化として、「よはい」「わがはい」「われ」の減少があげられる。「わがはい」「われ」の2語形のほうは、明六では43%と「よ」に次いで多く使用されていたものが、太陽I以降は10%未満にまで減少する。一方、「よはい」は明六の29%から減少するもののその程度は「わがはい」「われ」より緩やかで、太陽III・太陽IVに至っても14%を保つ。その結果、「よはい」は国民以降使用著者率第3位の位置を保持するが、「わがはい」「われ」は表3に見えるその他の少数語形と同程度なまでに使用著者率が落ち込むこととなった。

#### 4.2 複数用法の一人称代名詞

次に複数用法の通時の変化を見ていく。複数用法の一人称代名詞の使用著者数を雑誌種類別に示したものが表4である。

表4 複数用法の一人称代名詞の雑誌種類別使用著者数

一人称代名詞語形	明六	東洋	国民	太陽 I	太陽 II	太陽 III	太陽 IV	太陽 V
ごじん	3	9	17	49	14	11	3	
ごじんら			1					
ごせい	1							
よはい		1	3	4	1			
よはいら					1			
よら			2	2	6	5		
わがはい	4	1	5	6	2	1		
わがはいら					1			
われ	9	1	15	49	25	10	2	
われら			3	9	13	11	2	
われわれ			7	13	4	1		
一人称代名詞 使用著者数	14	34	63	161	96	56	22	1

表4によれば、複数用法を持つ語形の種類数は11で、単数用法を持つ語形種類数と比較して少ない。このうち、使用著者数が多く、複数の雑誌種類にわたって使用著者数が上位に位置する「ごじん」「わがはい」「われ」<sup>7</sup>「われら」「われわれ」を主要語形と見なし、その使用著者率の通時の変化を示したものが図3である。

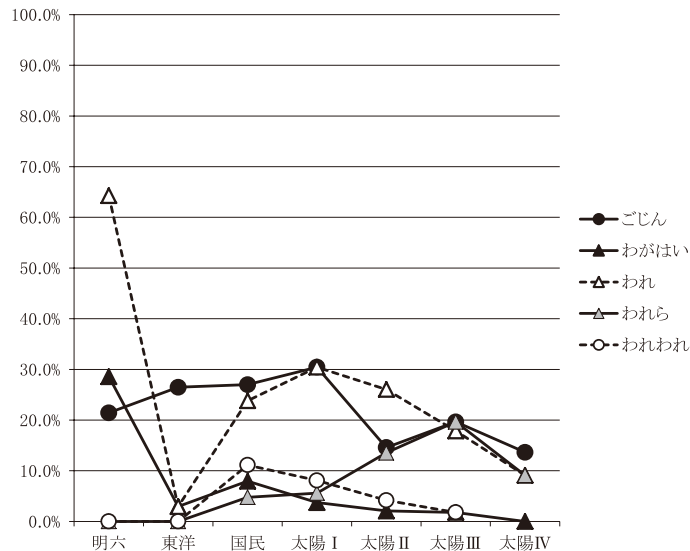


図3 複数用法の主要一人称代名詞の使用著者率の通時の変化

<sup>7</sup>「われ」の複数用法は『日本国語大辞典 第2版』（小学館）等の国語・古語辞典には管見の限りでは記述されていない。(13)のように著者を含む日本人全体を指す用法がほとんどである（629例中624例）。

図3から見出される変化の一つとして「われら」の増加がある。明六・東洋では使用されなかったものが国民以降増加し太陽 III で 20% に至る。

その他の語形では減少傾向が見られる。「わがはい」は、明六では 29% あったものが東洋以降 2～8% に減少し、太陽 IV に至り使用されなくなる。「われ」は、明六で 64% と他の語形と比べて際立って多く用いられていたものが、東洋でいったん 3% まで激減し、国民・太陽 I で 24%・30% まで回復、太陽 II 以降減少する傾向が見られる。「ごじん」は、太陽 I 以前は 21～30% の範囲にあるものが、太陽 II 以降は 14～20% の範囲まで減少する。また「われわれ」は、明六・東洋では使用されなかったものが国民ではいったんは 11% まで増加するが、太陽 I 以降は減少し、太陽 IV に至り使用されなくなる。この結果、明六では「われ」が第 1 位の語形、それに次ぐのは「わがはい」「ごじん」であったものが、「わがはい」は東洋以降衰退、一方で「われら」が増加し太陽 II 以降「われ」「ごじん」に拮抗するまでになった<sup>8</sup>。

#### 4.3 単数・複数両用法間での通時的変化

4.1 節・4.2 節でとりあげた主要語形のうち「ごじん」「わがはい」「われ」の 3 語形は、単数・複数両用法の主要語形であるが、両用法間での通時的変化が見られるのは「ごじん」である。「ごじん」は明六・東洋では複数用法のほうが多いものが、国民・太陽 I では単数用法と複数用法が拮抗、太陽 II 以降は単数用法のほうが多くなる。一方、「わがはい」「われ」にはそのような変化は見られず、「わがはい」は明六以降、単数用法が多いままほぼ推移し、「われ」は複数用法が多いままほぼ推移する。このように複数用法から単数用法へという用法面での通時的変化が見られる点に「ごじん」の特徴がある。

### 5. サンプルにおける語形使用タイプの通時的変化

#### 5.1 単数用法の語形使用タイプ

4 節で見たように、単数・複数の用法それぞれで、各語形の使用著者率の増減、上位語形の交代という通時的変化が見られた。その変化についてより詳しく考えるために、個々のサンプル内における一人称代名詞の語形使用タイプの通時的変化を見ていく。一人称代名詞は、1 サンプル中で 1 種類の語形が専用される場合もあれば 2 種類以上の語形が併用される場合もある。語形使用タイプとは、1 種類の語形の専用か、あるいは複数の語形が併用される場合の組み合わせのタイプを指すものである。

最初に、単数用法の語形使用タイプについて見ていく。単数用法の一人称代名詞が頻度 2 以上使用されるサンプルについて、雑誌種類別に使用著者数 2 以上の語形使用タイプを示したものが表 5 である（使用著者率降順に語形使用タイプを掲出、表 6・表 7 も同様）。複数種類の語形が併用されるタイプの場合、語形間を -（ハイフン）で繋いで示した。

<sup>8</sup> なお、東洋は他の雑誌種類と比較して、一人称代名詞の語形の種類が少なく、単数用法は「よ」、複数用法は「ごじん」が偏って使用されるという特徴を持つ。このような実態は、通時的変化に基づくものではなく、『東洋学芸雑誌』の資料性に起因すると考えられるが、詳細については稿を改めて考えたい。

表5 単数用法の語形使用タイプの雑誌種類別使用著者数・使用著者率

明六			東洋			国民		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
よ	8	57%	よ	23	68%	よ	22	35%
よ-わがはい	3	21%	ごじん-よ	4	12%	よ-よはい	9	14%
よ-われ	3	21%	よ-よはい	4	12%	ごじん	7	11%
よ-よはい	2	14%	わがはい	4	12%	よはい	6	10%
			よはい	2	6%	ごじん-よ	5	8%
			よ-わがはい	2	6%	ごじん-よ-よはい	4	6%
						しょうせい	4	6%
						よ-われ	4	6%
						わがはい	4	6%
						ごじん-われ	3	5%
						われ	3	5%
						ごじん-わがはい	2	3%
						ほく	2	3%
						よ-よはい-われ	2	3%

太陽 I			太陽 II			太陽 III		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
よ	64	40%	よ	32	33%	よ	14	25%
ごじん	19	12%	ごじん	16	17%	ごじん	11	20%
ごじん-よ	16	10%	ごじん-よ	12	13%	よ-よはい	6	11%
よ-よはい	15	9%	よ-よはい	11	11%	ごじん-よ	4	7%
ごじん-よ-よはい	5	3%	よはい	7	7%	よ-われ	4	7%
よ-われ	5	3%	よ-われ	5	5%	しょうせい-よ	2	4%
よはい	4	2%	われ	5	5%	よ-よら	2	4%
よ-よら	4	2%	ごじん-よはい	3	3%	よ-わがはい	2	4%
われ	4	2%	ごじん-よ-よはい	3	3%	よ-われら	2	4%
ごじん-よはい	3	2%	よ-わがはい	3	3%			
わがはい	3	2%	ごじん-よ-われ	2	2%			
			よ-われら	2	2%			
			わがはい	2	2%			
			われら	2	2%			

太陽 IV		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
ごじん	5	23%
ごじん-よ	4	18%
よ	2	9%

まず、「よ」と「ごじん」に注目して見る。「よ」「ごじん」ともに専用タイプの使用が非常に活発な点が類似する。そして、明六から太陽 III にかけて、「よ」専用タイプが使用著者率第 1 位であったものが、国民以降「ごじん」専用タイプが次第に増加し、太陽 III で「よ」専用タイプと拮抗、太陽 IV で「よ」専用タイプを超えて第 1 位の位置に付く。つまり、「ごじん」は「よ」に置き換わることで使用著者率 1 位に位置する語形に発展したのであり、それが図 2 に見た「ごじん」の増加と「よ」の減少という通時の変化となって現れたと言える。

次に、「よはい」に注目して見ると、「よ」「ごじん」とは異なり、専用タイプより「よ-よはい」

併用タイプでの使用が多い点が特徴的である<sup>9</sup>。「よ - よはい」併用タイプは「ごじん - よ」併用タイプと拮抗して併用タイプのなかで使用著者率の最も高いタイプである。「よはい」専用タイプは太陽 III 以降使用がなくなるが、「よ - よはい」併用タイプは太陽 III においても使用著者率 3 位の位置にある。「よはい」は「よ」と併用される形でその命脈を保ち、それが図 2 に見た「よはい」の緩やかな減少という通時的変化となって現れたと言える。以下の (21) に「よ - よはい」併用タイプのサンプル例をあげる。

- (21) 何十方里の榎山を焼失したる場合も掌大の牧場を焦したる場合も十錢の銀貨を以て米を購ひたる場合も數千萬も兌換券を行使したる場合も一括して其中に在るを思はゞ虚心平氣に解して余は十年乃至十五年の範圍を過大なりと信ずる能はず敵國を利する罪公衆の用水を害する罪の如き亦同じ殺人罪に付て司法省案は七年以上の懲役又は死刑を科し其七年以下に下るには酌量減輕の法を適用すべきものとしたるが如きは却りて余輩の大に反對する所なり  
(60M 太陽 1901\_02007 「刑法改正非改正」岡田三面子)

### 5.2 複数用法の語形使用タイプ

次に、複数用法の語形使用タイプについて見ていく。複数用法の一人称代名詞が頻度 2 以上使用されるサンプルについて、雑誌種類別に使用著者数 2 以上の語形使用タイプを示したものが表 6 である。太陽 IV は使用著者数 2 以上の語形使用タイプがなかったため、表中に示していない。

表 6 複数用法の語形使用タイプの雑誌種類別使用著者数・使用著者率

明六			東洋			国民		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
われ	7	50%	ごじん	7	21%	ごじん	5	8%
ごじん - われ	3	21%				われ	5	8%
ごじん	2	14%				ごじん - われ	4	6%
わがはい	2	14%						
太陽 I			太陽 II			太陽 III		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
われ	20	12%	われ	10	10%	ごじん	8	14%
ごじん	16	10%	ごじん	6	6%	われら	6	11%
ごじん - われ	10	6%	われら	4	4%	われ	5	9%
ごじん - われら	3	2%	ごじん - われ	3	3%			
ごじん - われわれ	2	1%	よら	3	3%			
よら	2	1%						
われわれ	2	1%						
われ - われわれ	2	1%						

<sup>9</sup>「よはい」の多くが「よ」と併用される実態は、明六・国民については近藤 (2016a, 2016b) で既に指摘したが、これが東洋・太陽といった別の雑誌種類にも拡げて当てはめられることが本稿で新しく確認された。



表6を見ると、明六から太陽Ⅰにかけては、順位の上下はあるにせよ「われ」専用タイプ・「ごじん」専用タイプ・「ごじん-われ」併用タイプの3タイプが上位3位を占め、主要なタイプであったことがわかる。それが、太陽Ⅱ・Ⅲになると「ごじん-われ」併用タイプが後退、代わって「われら」専用タイプが進展する。図3で見た「われら」の増加の実態に一致するところである。

### 5.3 単数・複数用法が併用される場合の語形使用タイプ

最後に、単数・複数の両用法が併用される場合について見ていく。一人称代名詞が単数・複数の両用法とも頻度2以上使用されるサンプルについて、雑誌種類別に使用著者数2以上の語形使用タイプを示したものが表7である。単数用法の語形使用タイプと複数用法の語形使用タイプとの間を|（パイプライン）で区切って示す。

表7 単数・複数用法併用の語形使用タイプの雑誌種類別使用著者数・使用著者率

明六			東洋			国民		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
よ ごじん-われ	2	14%	よ ごじん	3	9%	よ われ	2	3%
よ ごじん	2	14%						
よ われ	2	14%						
太陽Ⅰ			太陽Ⅱ			太陽Ⅲ		
語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率	語形使用タイプ	使用著者数	使用著者率
よ われ	8	5%	ごじん ごじん	3	3%	ごじん ごじん	3	14%
よ ごじん	5	3%	ごじん-よ ごじん-われ	2	2%	ごじん-よ ごじん	2	9%
ごじん-よ ごじん-われ	4	2%	ごじん-よ われ	2	2%	よ ごじん	2	9%
ごじん ごじん	3	2%	ごじん われ	2	2%			
わがはい われ	2	1%	よ われ	2	2%			
ごじん-よ ごじん	2	1%						
ごじん-よはい ごじん-われ	2	1%						
よ ごじん-われら	2	1%						

単数・複数の両用法間での語形の使い分けに注目して見ると、太陽Ⅰ以前は単数用法と複数用法では使用される語形が異なるタイプが上位を占め、用法間で語形を使い分けることが主流であったことがうかがえる。しかし太陽Ⅰ以降、単数・複数両用法で「ごじん」が使用されるタイプが増加し、語形の使い分けが見られないタイプが主流となっていく。図2で見たように「ごじん」は単数用法を進展させ第1位の位置を獲得していった一方、図3で見たように複数用法でも主要語形としての位置を保持した。その結果、単数・複数の両用法間で語形の使い分けがされなくなるという実態が生じたと言える。

## 6. 結論

以上、『CHJ 明治・大正編Ⅰ雑誌』と『東洋学芸雑誌』1～15号を資料として、明治・大正期の非文芸ジャンルの文語文における一人称代名詞の通時的変化を分析・考察した。得られた主な結論を以下にまとめる。

- I. 単数用法の一人称代名詞の変化のなかで注目されるのは「ごじん」の増加・進展である。明六以降「よ」が単数用法の第1位の位置を保持するなかで、「ごじん」はその勢力を拡張し太陽IVに至り「よ」を抜いて第1位の位置を獲得した。「ごじん」以外の主要語形「よ」「よはい」「わがはい」「われ」は減少あるいは衰退した。
- II. 複数用法の一人称代名詞の変化のなかで注目されるのは「われら」の増加・進展である。国民以降勢力を拡張し、太陽III・太陽IVに至り「われ」「ごじん」と並んで第1位の位置を獲得した。「われら」以外の主要語形「ごじん」「わがはい」「われ」「われわれ」は減少あるいは衰退した。
- III. 「ごじん」は、当初複数用法で主に用いられていたものが、次第に単数用法を進展させ、単数用法で第1位の位置にまで至った。その「ごじん」の進展は、単数用法の語形使用タイプの主流が「よ」専用タイプから「ごじん」専用タイプに置き換わっていくことから明らかのように、「ごじん」が「よ」の位置に置き換わることでもたらされたものである。
- IV. その一方、「ごじん」は複数用法でも主要語形の位置を保持した。その結果、当初単数・複数の用法間で語形を使い分けることが主流であったものが、太陽I以降、単数・複数両用法で「ごじん」が使用されることで語形の使い分けのない語形使用タイプが多くなった。

このように、明治・大正期の非文芸ジャンルの文語文では語形「ごじん」が軸となって一人称代名詞の通時的変化を作り出していることが明らかになった。

表1で太陽Vの言語量が非常に少ないことに現れているように、大正期以降、書き言葉において文語文は衰退し、文語文での一人称代名詞の通時的変化を追うことは不可能になる。書き言葉における一人称代名詞の以後の通時的変化は、文語文に代わって発展した口語文において辿っていくことが必要である。文語文での実態と口語文での実態の共通点・相違点にはどのようなものがあるのか稿を改めて考え、書き言葉全体での一人称代名詞の通時的変化について考察を深めたい<sup>10</sup>。

## 参考文献

- 房極哲 (2004) 「近代語における一、二人称代名詞の変遷について」『日本文化学報』21: 1-15.  
 国立国語研究所 (2006) 『近代女性雑誌コーパス』 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/woman-mag/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/woman-mag/)  
 国立国語研究所 (2012-2013) 『明六雑誌コーパス』 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/meiroku/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroku/)  
 国立国語研究所 (2014) 『国民之友コーパス』 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/kokumin/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/kokumin/)  
 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編I雑誌』 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/meiji\\_taisho.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html)  
 国立国語研究所 (編) (2005) 『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』東京：博文館新社。  
 国立国語研究所国語辞典編集準備室 (1983) 『用例採集のための主要雑誌目録』東京：国立国語研究所国語辞典編集準備室。  
 近藤明日子 (2013a) 「近代総合雑誌記事に出現する一人称代名詞の分析—単語情報付き『太陽コーパス』を

<sup>10</sup> 近藤 (2013a) では『太陽コーパス』を資料として口語文での一人称代名詞の通時的変化を一部の語形について分析したが、本稿の結論と比較するためには『CHJ 明治・大正編I雑誌』を資料とした分析を改めて行う必要がある。

- 用いて一」『近代語研究』17: 134-154.
- 近藤明日子 (2013b) 「近代女性向け雑誌記事における一人称代名詞の分析—形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』を用いて一」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』313-322.
- 近藤明日子 (2016a) 「『国民之友コーパス』を利用した近代文語文に出現する一人称代名詞の計量的分析」『国語語彙史の研究』35: 70(219)-92(197).
- 近藤明日子 (2016b) 「『明六雑誌』の一人称代名詞の分析—文語記事地の文の用例を中心に—」『近代語研究』19: 141-159.
- 近藤明日子 (2017) 「近代文語文の通時的变化の分析—語種率・品詞率に注目して—」『言語資源活用ワークショップ2016 発表論文集』355-364.
- 岡田賢二 (1998) 「明治期の東京語における人称代名詞の研究—明治・大正期の落語の速記本にあらわれた一、二人称代名詞—」『埼玉大学国語教育論叢』2: 34-58.
- 祁福鼎 (2006a) 「明治時代語における自称詞の使用実態と使用規範について」『文学研究論集』24: 45-61.
- 祁福鼎 (2006b) 「明治時代語における自称詞の推移と位相について」『明治大学日本文学』32: 95(1)-78(18).

## Diachronic Changes in First-Person Pronouns in Literary Style Text during the Meiji and Taisho Periods: Analysis of the “Corpus of Historical Japanese, Meiji Era / Taishō Era Series I: Magazines” and the “Toyo Gakugei Zasshi”

KONDO Asuko

Adjunct Researcher, Center for Corpus Development, NINJAL

### Abstract

I studied and analyzed the “Corpus of Historical Japanese, Meiji Era / Taishō Era Series I: Magazines” as well as the “Toyo Gakugei Zasshi” (editions 1–15) to clarify the actual state of quantitative and qualitative diachronic changes in the use of first-person pronouns in literary style text from the non-literary genre during the Meiji and Taisho periods. The analysis elucidated the following observations: i) an increase and development in the singular usage of *gojin* (吾人) and a decrease in the usage of *yo* (余); ii) an increase and development in the plural usage of *warera* (我等) and the competition between *warera*, *gojin* and *ware* (我); and iii) the disappearance of the separate usage of word forms between singular and plural with the development of the singular usage of *gojin*.

**Key words:** modern Japanese, literary style text, first-person pronouns, singular and plural usage, “Corpus of Historical Japanese”